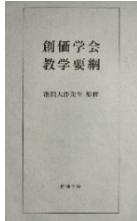


魂の独立記念日に思う―「教学要綱」の不正 2025年11月28日

創価高校・大学4期 図斉修

11月18日、学会創立95周年の佳節を過ぎ、本日、魂の独立記念日を迎え、私は以下の思いです。―「教学要綱」の邪義により本当の魂の独立はない、否、否定状況である―と。以下、詳述します。（以下赤字、青字等は図斉による）



2023年11月18日に発刊の「教学要綱」の78、79頁には、御本尊の相貌について以下記述です。一大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華経』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華経」の脇士に位置づけられている。これは「南無妙法蓮華経」こそがすべての仏を生み出した能生であり、ゆえに根本の本尊たるべきことを示している。したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。―と。そして2024年5月3日に発刊の教学部編観心本尊抄の186、187頁も同じ記述です。（「教学要綱」の能生→「教学部編」は根本の法に）

池田先生は、観心本尊抄講義（池田大作全集24巻305頁）で、以下ご指導です―「我が如く等くして：：」から「：：己心の菩薩なり」の段について、師弟不二、親子一体、君臣合体に拝するの、主師親三徳具備の人本尊を開顕せられた「開目抄」の本意も包含されているゆえであり、そして、末法の人本尊としての御本仏日蓮大聖人の御生命は、一切そのまま、観心の御本尊の中に移されているとの深意であります。大聖人即御本尊、御本尊即主師親三徳具備の御本仏との甚深の義を深く拝する―と。従って「寿量の仏」を釈尊と記述した「教学要綱」と教学部編はこのご指導に違背した邪義であると確定されます。

私は「寿量の仏」について、11.18拙文 <https://share.google/gNKItN0iBMtIFf1pt> 106頁の5と116～123頁で論証しましたが、本日、「魂の独立」の意義に鑑み追論します。また、両書が一これは「南無妙法蓮華経」こそが(中略)根本の本尊たるべき―とだけ記すことは単法本尊論への偏意であり、日蓮仏法の真義、人法一箇の御本尊論を遮蔽、否、否定であると断じ、結果、それは、御聖訓「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」（「経王殿御返事」）のご聖訓にも違背し、日蓮が魂を否定、ひいては、私たちの魂の自由をも否定なのだと断定します！

そして、上記、両書の記述こそが御本尊の相貌へ最悪の邪義と断じます！

又、「教学要綱」が「**久遠元初自受用身**」を一切無視することは『開目抄』について、池田先生のご指導—佐渡で『開目抄』を書いているのは、日蓮の**魂魄**そのものであると言われている。この「**魂魄**」とは発迹顕本された御内証である「**久遠元初自受用身**」にほかならない（開目抄講義）—にも違背であり、御本尊＝日蓮の**魂**（生命）の尊極、独立を阻害することと同然である。そして現在も、真の**魂**の独立とは言えないとの思いです！**魂**の独立は、制限なく完全でなければならない。「教学要綱」が「日蓮大聖人は、単に釈尊から託された『南無妙法蓮華經』を弘める菩薩である」（91頁）と制限することも、**魂**の独立を阻害するのだ！と断言します。

私は、さらに以下思います。

一日蓮大聖人の御本尊＝南無妙法蓮華經 日蓮＝人法一箇のご当体＝**久遠元初の自受用身如来**であり、池田先生のご指導—「我等此の五字を受持すれば…」とは、この御本尊に帰依する受持の一念の中に、もったいなくも日蓮大聖人の御命、そして**久遠元初の自受用身如来の命**が通ってくるのであります。（観心本尊抄講義）—より、「教学要綱」が底意として釈迦本仏論を潜在させ、日蓮仏法を否定することは、即、私たちの**久遠元初の自受用身如来の命**を否定しているのと同然であり、それはまた、まさに、私どもの「**魂の独立**」を阻害しているのだと！「教学要綱」の邪義は、私たち学会員の本当の「**魂の独立**」を阻害していると断じます。ゆえに「教学要綱」は即刻、絶版にすべきです！

池田先生は開目抄を人本尊開頭の書であると明確にご指導され、その上で、観心本尊抄講義において、観心本尊抄が法本尊開頭の書であることと併せて、日蓮大聖人の観心の本尊は、「人法一箇」であることを宣言されたのです！

しかし、教学部編「観心本尊抄」は、観心本尊抄が法本尊開頭の書であること、又、日蓮仏法の最重要義「人法一箇」を記しませ
ん。これこそ、池田先生のご指導への最悪の違背なのです！

さらに、池田先生は、「観心本尊抄」講義（池田大作全集24巻269頁）で一インド応誕の釈尊は、蔵・通・別・円の四教を説く過程に即して、それぞれ蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊というふうに、仏身を現じてきた。更に円教である法華經においても、迹門の釈尊、本門文上の釈尊と異なりがあります。以上五つの釈尊が、釈尊の仏法の領域であるのに対し、日蓮大聖人は、寿量文底に秘沈せられた南無妙法蓮華經を説く、末法の御本仏としての本地を明らかにされているのであります。これ文底の釈尊であり、釈尊といっても、このように多義にわたることを心得ていかなばなりません。—と、記述です。

（私見）つまり、「教学要綱」と教学部編観心本尊抄は共に、池田先生の上記日蓮大聖人は、寿量文底に秘沈せられた南無妙法蓮華經を説く、末法の御本仏としての本地—に、全く違背なのです！結論、「日蓮大聖人が寿量の仏」なのであり、両書の記述—大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。—は邪義なのです！

上記論述中に、親友中村誠氏より下記の論稿を頂きました。正論と拝します。ご紹介します。

「本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし」この御文の解釈だが、脇士とは本尊の補助としての役割を担う存在であり、本尊そのものではない。従って、所謂を同格と解釈して、本尊の釈尊＝脇士の釈尊とすることは論理的に崩壊してしまう。

この矛盾した解釈を、教学要綱及び、新版の観心本尊抄は行っており、これは宮田幸一氏の論文とほぼ同一の解釈といえる。しかし、宮田氏は彼の論文で、自身の解釈の矛盾について次のように認めている。

『本尊問答抄』について <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>

「3-5 まとめ 前文で「本門教主釈尊」が本尊となることが明示されているにもかかわらず、後文の「釈迦」が同じ対象を指示しているなら、それが「脇士」となることは論理的に矛盾している」

また、この宮田氏の独自解釈は、釈尊を同様に脇士の存在と説く観心本尊抄の御文、「本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」に矛盾してしまう。釈迦はある時は本尊だけど、ある時は脇士という解釈はご都合主義以外の何物でもなく、これは教学要綱の、一日蓮大聖人は御本仏だけど釈迦の弟子、釈迦の弟子なんだけど一応御本仏一というご都合主義に通じるものがあり、単なる言葉遊びにすぎないので、全て矛盾を含む邪義である。追加の議論だが、身延流の観心本尊抄の解釈、「本門の釈尊の脇士と為りて一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」と読ませるのは、法勝人劣の観点から同様に邪義である。

ではどう解釈すべきかという、御義口伝の次の御文「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」に従い、本門の教主釈尊＝日蓮大聖人、と解釈したときに、脇士と本尊の関係の矛盾は全て消滅する。御書に説かれる「釈迦」を「日蓮」と解釈することは、日興上人の直弟子であつた三位日順にすでにみられるものであり、決して日興門流の捏造などではないのである。以下がそれである。

「日本国は久成の上行菩薩の顚れ玉うべきなり。しかるに天竺の仏は迹仏なり、今日本国に顚れ玉うべき釈迦は本仏なり。彼の本仏の顚し玉ふ所なれば日本を中国と云ふなり」(『富士宗学要集』第2巻, p.113)。そもそも主題の題目の下(真下とは説かれていない)に来る日蓮の二文字は、観心本尊抄には「本師の娑婆」、即ち靈鷲山という娑婆世界で説法教化する釈迦如来と説かれており、この寿量の仏が住まうところに、日蓮の二文字が来ることから、既にこの時に、日本国に出現される教主釈尊という思想があつたとみなされよう。

即ち、寿量の仏＝日蓮、である。釈迦と説く教学要綱及び新版の観心本尊抄は重大な謗法を犯しているのである。

教学要綱、或いは新版の観心本尊抄講義は、明らかに御義口伝の本尊の御文「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」を無視、或いは偽書とみなした解釈であり、これは宮田氏の重要視する、日蓮の真筆か直弟子の写本が残るもの以外は全て信頼できない文献として切り捨てる、身延のルールである大崎ルールに学会の教義が影響を受けていることを示すものであり、御義口伝を重要視された、戸田・池田先生に背く解釈といえよう。ーと。

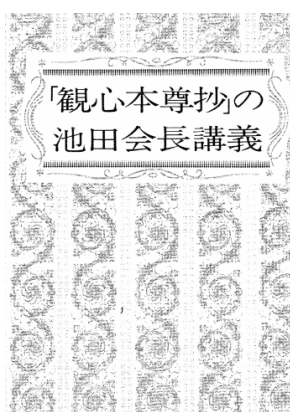
(私見) ここまで、「教学要綱」と、新版の教学部編観心本尊抄の邪義—寿量の仏は釈尊—について、検証、破折、そして、中村氏の論稿で「教学要綱」を記したと自認する宮田幸一氏の論稿についても、正邪が明らかになりました。

私は、御本尊をこの様に深く教学的に拝して行かないと、信行学のバランスが崩れ、命の底から沸き上がる大歓喜と大境涯を他者に伝播することは出来ないと思います。教学要綱の説明書には「客観的」という紛らわしい表層的文言が尤もらしく浮き上がっていますが、内外の様々な宗教学者の二乗の命に響かせることが出来ても、所詮、自己満足同士の感応妙に過ぎないのです。

大我の境地に立った御本尊と境地冥合する私達の唱題行の根幹となるのが、本因妙の日蓮仏法を解き明かした先生の珠玉の御書講義であります。これを捨て、蔑ろにすることが、如何に御本仏大聖人に叛く大罪であるか、一人ずつ目を開かせて行く戦いを継続して参ります。

日蓮仏法と釈迦仏法における勝劣を論じることの重要性を、あらためて感じております。今回、新たに、池田先生の「観心本尊抄」の原本を再読、研鑽できたことは、自身の教学を更に深化することとなりました。

そして、池田先生の「観心本尊抄」原本について、更に研鑽いたしましたので、下記、ご紹介、論考させていただきます。



私は、11月18日、創立95周年の直後に、池田先生が1978年の初頭にされた「観心本尊抄講義」を再度、拝読し、新たに下記の発見、思いに至りました。

— 池田先生が記された釈迦仏法の本果論の限界について、また、その際に引用の夏目漱石の「こころ」の文章が完全に削除されている。これほど大事な池田先生の文学論をなぜ削除したのかと。

そしてさらに、以下思いました。一本因妙（日蓮大聖人の仏法）と本果妙（釈迦の仏法）の本質、勝劣、そして因果俱時なのか、因果異時なのか。

釈迦の仏法に希望はあるのか、生命の因果を説き、過去世の謗法を知り、歴劫修行を経て1つ1つ謗法の因を取り除き、すべての謗法の因を取り除くことが一般の人間に可能なのか。

夏目漱石の「こころ」に出てくる「先生」は「友人」に先んじて下宿先のおかみさんに娘さんをくださいとって結婚の内諾を得る。そのことを知った「友人」は自殺する。その罪業を背負って死んだように生きていく「先生」。目に見える因果にすらおびえきって「先生」も結局は自殺することになる。目に見えない罪業を背負って人は生きていけるのか。ーと。

新版
池田
会長
全集
第十卷
講義編

上記、1978年初頭の池田先生の観心本尊抄講義から削除の箇所を次頁以降に記しました。そしてその後、新版池田会長全集第十卷（1985年）、と池田大作全集第24卷（1988年）に収録される際に、釈迦仏法の本果妙の悲惨な部分はことごとくカットされてしまった。なぜか？



この時にはすでに、「教学要綱」と同じく、執筆陣には釈迦仏法に傾斜し、それを後続の学会員に洗脳しようとする底意があったのだろうか、そうとは思えない。

なぜ、日蓮仏法の蘇生の力、本源力を釈迦仏法と対比して示さないのか、なぜ、これほどまでに池田先生の本実のご指導を削除するのか！私は、池田門下生の正義を厳護する責務と使命から、また、この事実を記し置こうと決意致しました。

以下、1978年の「観心本尊抄講義」55～62頁の削除です。池田先生は、全文で日蓮仏法＞釈迦仏法をご指導です。それについて、以下、（私見）も記させて頂きました。池田先生の講義は下線部でございます。

未来創造へ向かう 本因妙の仏法

私はこのことを、本因妙、本果妙という観点から、若干論じてみたい。これについては「百六箇抄講義」でも触れましたが、御本尊の深義を知るためには、欠かすことのできない観点だからであります。本因妙、本果妙というもとの論議は、ここではおくことにして、恩師の言を借りて生のとらえ方の相違として論ずることにいたします。およそ生命は、極言すれば、現在の一瞬にこそ実在する、といってよい。現在の一瞬は矢のごとく流れ去り、次の瞬間には、すでに過去となっております。また未来は、瞬時のうちに、現在へと流れこんでまいります。生命は、この瞬間瞬間にしかありえないのであります。

永遠といえども、瞬間の連続にほかなりません。しかも私どもは、この瞬間に幸福を感じ、不幸にうちのめされ、希望に胸ふくらませ、また 逆に、絶望のどん底にあえぎつつ生活を送るのであります。そして、その一瞬のなかに、生命の因果が貫かれているのであります。過去のあらゆる行業、つまり一切の行動の集積が因となって現在を規定し、現在の果として表れております。同時に、現在の生命活動が因となり、未来に果をもたらしていきます。

このように、現在の瞬間を離れては過去もなければ未来もありません。現在、一瞬の生命のうちに、過去遠遠劫の生命を包含し、現在の一瞬を起点として未来永劫の生命を開いていくのである。そして、その一瞬にあらわれた生命の実相を、どうとらえるかによって、本果妙の仏法と本因妙の仏法との天地雲泥の差がでてくるのであります。すなわち、現在を、ただ過去の因による果であるとのみとらえて、その結果に執着していく姿勢、生き方が、本果妙の仏法であります。それに対して、現在の一瞬を未来への因とするのが、本因妙の仏法にほかなりません。生命はたしかに原因・結果の法則によって動いており、現在の自分が過去の因による果であることは否定できません。

御書にいわく「高山に登る者は必ず下り我人を軽しめば還て我身人に輕易せられん形状端嚴をそしれば醜陋の報いを得人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず正法の家をそしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ是は常の因果の定まれる法なり」(『佐渡御書』同九六〇頁)と。これは般泥洹經の文意を、大聖人ご自身の言葉で述べられたものであり、いわゆる因果の巡りゆくさまを端的に示されております。「常の因果の定れる法なり」と仰せのように、このような因果応報の哲理は、事実としてあります。

そのため、現在の色心に業果を感じつつ生きなければならないのであります。しかしながら、ただそうした因果の連鎖にとどまっているかぎり、業果の宿命にあえぐ現在から、明るい未来を開く可能性ははなはだ弱いといわざるをえません。たとえば現在の瞬間、餓鬼界の苦悩に沈んでいる人がいるとする。その人が苦悩の因を過去に求め、衣服飲食を奪ったという原因を探しあてたとしても、どうしてそんなことをしたのかとの後悔の念に責められるのみで、過去にさかのぼって原因から変えることなどできる道理がない。

たとえ未来の幸福を夢見たとしても、これからの一生、さらには順次生にわたって、業因を一つ一つ断ち切っていかなければならない。せめてこれからよい結果を生ずる原因をつくっていかうとしても、その自分が重い過去を引きずっていては、思うように動くこともできません。人によっては、絶望のあまり、自暴自棄の生活に陥ってしまったり、みずから死を選ぶような破局を招いてしまう場合もあるかもしれません。

(私見) 生命がどのように流転してきたか、あるいは、これからどのように流動していくかという法理を説くことは可能であっても、これからどのように生命を変革していくかという変革への原動力は説かれていない。つまり、どうなるかは説きえても、この生命、人生をどうするかという主体的、能動的な変革の力を説き示さなかったのが、本果妙の釈迦仏法なのであります。

漱石の「こころ」にみる本果妙の生き方

夏目漱石に「こころ」という作品があります。有名な小説なので、ご存じの方も多いと思う。詳しい筋は省くとして、先生という主人公が、友人、Kを巡って織り成すエゴイズムの葛藤が、そのテーマであります。二人はともに大学生であり、ある家庭に下宿している。その家にきれいなお嬢さんがいて、先生はほのかな恋心を感じている。ところがあるとき突然、勉学一途で、恋などおおよそ無縁であったようなKから、お嬢さんへの苦しい恋心を打ち明けられる。

その時から先生の心は、複雑に揺れ動くのですが、結果は、Kに先手を打って、先に求婚し、内諾を得てしまう。当然、その話はKにも伝わり、絶望したKは、頸動脈を一気にかき切って自殺してしまうのであります。ただ、自分は薄志弱行で、とうてい行く先の望みがないから自殺するという、先生宛の簡単な遺書のみ残して。

Kの自殺を目撃した夜の先生の心境を、漱石はこう描写しています。「その時私（先生）の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の目は彼の室の中を一目見るや否や、あたかもガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策ったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。そうして私はがたがたふるえだしたのです」

その一瞬からか先生の心は、罪の意識のとりこになってしまう。卒業してほどなく、お嬢さんと結婚するが、結婚生活もその黒い光を追い払ってはくれない。酒にまぎらわそうとしてもならず、研究生活に没頭しようとしても、いつのまにか、背後からしのびよってくる。ついにH先生は、死んだつもりで生きてゆこうと決心する。「死んだつもりで生きてゆこうと決心した私(先生)の心は、時々外界の刺激でおどりがりました。しかし私がどの方面かへ切って出ようと思い立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと押え付けるように言って聞かせます。すると私はその一言ですぐ、ぐたりとしおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、なんで他（ひと）の邪魔をするのかとどなりつけます。不可思議な力は冷ややかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります」

その結果、先生は、妻を一人残し、みずからの命を断ってしまうのであります。罪業を意識しつつ生きることが、人間にとって、いかに重圧となるかが、よく描かれております。漱石は、仏教については一言も語っておりませんが。先生の生きなければならなかった一生は、本果妙の生き方と酷似しているといつてよいかと思えます。しかも先生の場合は、現世のなかでの、目に見える因果の鉄鎖であります。それですら、人間を死に追い込むほどの重みをもっているのであります。まして我々が、過去遼遠劫から積んできた業因果は計り知れぬほどのものがありましょう。もしその業果を、一つ一つ消していかなければならないとすれば、大半の人達が絶望してしまうにちがいありません。ともあれ、そのよう修行方法が釈迦一代教法の骨格をなしているのであります。現在の生命を過去の業因の結果として説き、そうした次元の因果しか説かない仏法によっては、未来を開拓する希望も歓喜もわきいずるはずはないのであります。

生命がどのように流転してきたか、あるいは、これからどのように流動していくかという法理を説くことは可能であっても、これからどのように生命を変革していくかという変革への原動力は説かれていない。つまり、どうなるかは説きえても、この生命、人生をどうするかという主体的、能動的な変革の力を説き示さなかったのが、本果妙の釈迦仏法なのであります。

宇宙をも揺り動かす力用

これに対し、現在の瞬間の生命の因果を、その奥底に至るまで洞察し、そこに一切を生ずる本源の妙法を見いだした本因妙の仏法にして初めて苦悩の人生をどうするか希望と方途が開示されたのであります。それは本果妙のように、生命現象の表層ではなく、生命それ自体の深層に立っているからであります。表層と、深層との次元の相違は、さきにあげた『佐渡御書』の「是は常の因果の定れる法なり」の次下に「日蓮は此因果にはあらず」と、ご自身の立場を明示されている点からも、明らかであります。すなわち大聖人は、浅き近因近果の辺域を去って、深く久遠に通ずる本因本果の体を、現在一瞬の生命の奥底に見いだされました。それこそ、十界の因果を織りなしつつ流転しゆく生命の当体であり、かつまた大宇宙をも揺り動かしゆく本源の力である、久遠の南無妙法蓮華経なのであります。文底仏法より拝した「釈尊の因行・果徳の二法」とは、このことを意味すると拝するのであります。

「受持」の一念に輝く大功德

戸田先生は「三世の因果」と題する講演のなかで、御本尊の功力について、次のように述べております。「(御本尊に)帰依して南無妙法蓮華経と唱えたてまつることが、よりよき運命への転換の方法であります。この方法によって、途中の因果がみな消えさって、久遠の凡夫が出現するのであります」と。私はこの言葉のなかに、恩師の境涯の深さが痛感されてなりません。(中略)。私どもが御本尊と対座するときは、久遠の仏と久遠の凡夫が対座しているのであります。「途中の因果がみな消えさって、久遠の凡夫が出現する」とは、まさにこのことを意味しているといえましょう。それが即、未来永劫の功德の果をもたらす本因となるのであります。釈迦は三千塵点劫、五百塵点劫の長遠を説きました。それに対し日蓮大聖人は、久遠元初の深遠を説き明かされました。それは、たんなる時間の長短ではなく、釈迦仏法で明かしている、通途の因果の連鎖をことごとく打ち破って、宇宙と人間を撰する生命そのものを根底まで掘り下げた、元初の法を立てられたのであります。「途中の因果がみな消えさる」ということは、あたかも太陽が昇ると、満天に輝いていた月や星が見えなくなってしまうようなものであります。それらは、なくなったのではなく、すべて陽光のなかに包み込まれてしまっております。

それと同じように、本因妙の仏法は、釈迦をはじめとする十方三世の諸仏の光を包み込んで、なおかつ燦然たる威光を遍く及ぼしているのです。ゆえにそれは、釈迦仏法の発想法それ自体の転換でありました。

(私見) 生命がどのように流転してきたか、あるいは、これからどのように流動していくかという法理を説くことは可能であっても、これからどのように生命を変革していくかという変革への原動力は説かれていない。つまり、どうなるかは説きえても、この生命、人生をどうするかという主体的、能動的な変革の力を説き示さなかったのが、本果妙の釈迦仏法なのであります。

以下、1978年の「観心本尊抄講義」68～72頁。削除です。

「自得」とは 生命本来の会得

ここで「自得」について少々触れておきたい。寿量品自我偈の冒頭に「自我得仏来」とあります。これは「我仏を得てより来」と読み、釈尊が仏身を得てから五百塵点劫を経歴していることを述べた文であります。日蓮大聖人の仏法においては、さらに深い文意となります。なぜなら大聖人の仏法は、一つの時点で仏を得るというのではなく、常住して本来仏であると説いております。したがって、文底観心における読み方は「我仏来を自得せり」となるのであります。これについて『御義口伝』では「我は法身・仏は報身・来は応身なり此の三身・無始無終の古仏にして自得なり、無上宝聚不求自得之を思う可し」(同七五六頁)とあります。「我」とは三世に常住して続きゆく仏の生命それ自体であり、法身如来となる。「仏」とは本仏の大生命から顕れる智慧であります。仏法を自在に説いて人々を化導するとともに三世を通観し、瞬間瞬間、価値創造していく大智慧をいうのであります。これ報身如来の働きであります。「来」は久遠元初の自受用報身如来が苦悩に沈む人々を救うためにあらわされたご行動、お姿であり、したがって応身如来となります。この久遠元初の無作三身如来こそ日蓮大聖人であられ、また、その魂魄である御本尊なのであります。この三身如来を「自得」、すなわち、他から与えられるのではなく、おのずから得たというのが日蓮大聖人の仏法における自我得仏来の意味であります。釈迦仏法の考え方は、仏寿の長遠であることをもって究極としています。いくら五百塵点劫という想像を絶する長遠の時間を説いたとしても、まだ特定の時点、したがって有限の過去という考えから脱却してはいない。その考えを持ち続けるかぎり、仏は「成る」ものであるという考え方になります。したがって、仏と衆生とは、その根底に隔絶があるのであります。

事実、釈尊は想像を絶する過去に「菩薩道」の積み重ねのうえに、ようやく久遠実成を果たしたのであります。ところが、日蓮大聖人の仏法においては、哲理のうえでは久遠とは常住の意であり、昔ではなく、時々刻々が久遠になる。久遠は今であり、今が久遠である以上、仏とは「成る」のではなく「成（ひら）く」ものであります。生命本来の会得であるがゆえに「自得」となるのであります。したがって別して久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人も三身自得であります。総じて妙法をたもつ私どもも本来三身を有しているのであります。「無上宝聚・不求自得」とは、決して声聞に限るのではなく、一切衆生にわたるのであります。『御義口伝』の「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは自我得仏来の行者なり(同七五六頁)とあるのはその意であります。

（私見）「自得」とは 生命本来の会得ここで「自得」について少々触れておきます。寿量品自我偈の冒頭に「自我得仏来」とあります。これは「我仏を得てより来」と読み、釈尊が仏身を得てから五百塵点劫を経歴していることを述べた文であります。日蓮大聖人の仏法においては、さらに深い文意となります。なぜなら大聖人の仏法は、一つの時点で仏を得るというのではなく、常住して本来仏であると説いております。したがって、文底観心における読み方は「我仏来を自得せり」となるのであります。

そして、釈迦仏法の考え方は、仏寿の長遠であることをもって究極としていますが、いくら五百塵点劫という想像を絶する長遠の時間を説いたとしても、まだ特定の時点、したがって有限の過去という考えから脱却してはいない。その考えを持ち続けるかぎり、仏は「成る」ものであるという考え方になります。したがって、仏と衆生とは、その根底に隔絶があるのであります。事実、釈尊は想像を絶する過去に「菩薩道」の積み重ねのうえに、ようやく久遠実成を果たしたのであります。ところが、日蓮大聖人の仏法においては、哲理のうえでは久遠とは常住の意であり、昔ではなく、時々刻々が久遠になる。久遠は今であり、今が久遠である以上、仏とは「成る」のではなく「成(ひら)く」ものであります。

以上、1978年初頭の池田先生の観心本尊抄講義の削除です。結論、日蓮仏法の文底、最重要のご指導が削除なのです！それも、池田先生の文学論一漱石の「こころ」を通した釈迦仏法の限界を述べられた珠玉の文学論一を削除！こんなことがあっていいのでしょうか！ 12/15



池田先生は「御義口伝講義下」65頁で一寿量品の奥底は、まさしく日蓮大聖人の仏法に帰着していくのである。されば日蓮大聖人こそ寿量品の本主、すなわち寿量文底の仏なのである一と。また、66頁で一寿量品は偉大であるとはいえ、これを釈迦仏法として読むならば、決して末法の全民衆救済の要法とはならないのである。(中略)経文を持って、文上の釈尊の境地を述べようとは、毛頭されていない。この経文を用いて御自身の久遠元初の成道を説かれるのである一と記されています。

さらに、本年1月2日、池田先生のご生誕日に発刊、著者池田大作と明記された「御義口伝」要文講義217頁で一大聖人は、成仏の道を開く大法が南無妙法蓮華経であることを寿量品の本主という観点から論じられます一と。また、219頁で一御義口伝では題目を唱える日蓮等の類いが「寿量品の本主」である一と記述です。この池田先生のご指導に違背し、一寿量の仏は釈尊一と記す「教学要綱」と教学部編観心本尊抄は、「日蓮がたましひ」である御本尊様の相貌について邪義を述べるという大謗法の書なのです！



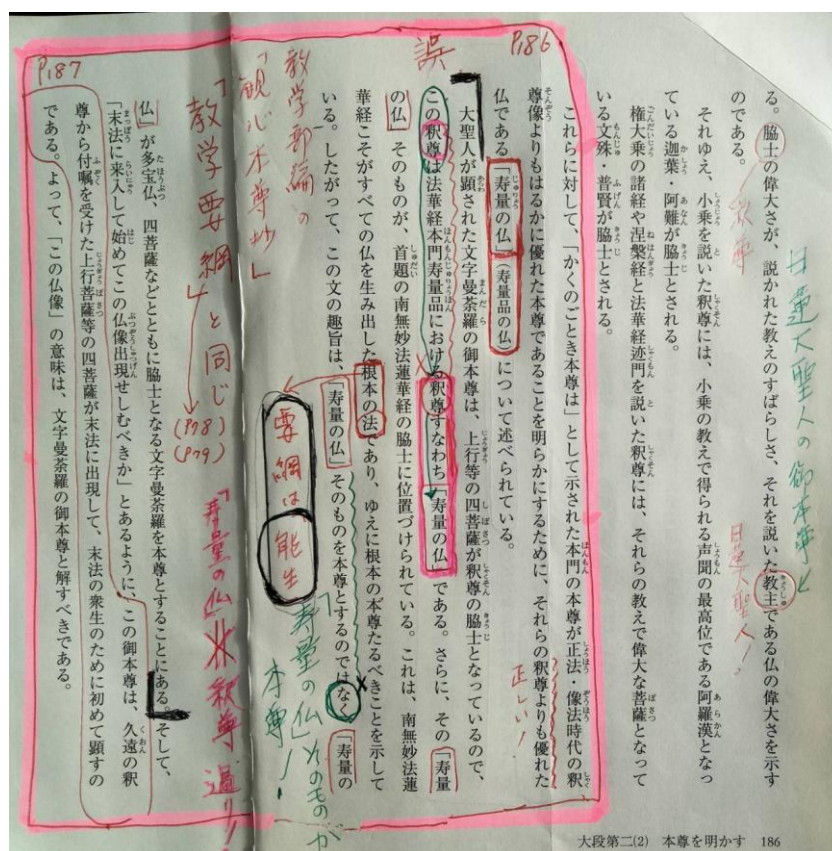
また、池田先生の法華経方便品・寿量品講義2 寿量品一1(1996年1月2日発刊)31頁では一文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も述仏となる一と。また、44頁の小題一あらゆる仏の本地は南無妙法蓮華経一のところでは一実は、この「如来秘密神通之力」を文底から読めば、久遠における釈尊の成仏の根底に南無妙法蓮華経が秘されているのです。(中略)文底では南無妙法蓮華経が本仏であるのに対して、釈迦・多宝などの一切の諸仏は、南無妙法蓮華経の働きを表した述仏となります一と。

さらに、51頁の小題一「如来秘密神通之力」とは御本尊の大功力一のところで一日蓮大聖人は、御自身の南無妙法蓮華経如来の生命を御本尊として顕わされました。まさに、「如来秘密神通之力」とは、御本尊の事です一と。

上記、池田先生の寿量品講義により、「教学要綱」と教学部編観心本尊抄の一釈尊は『法華経』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」一は、完全に誤りなのです。

最後に、「寿量の仏」が日蓮大聖人から釈尊に変更された証拠を記し置きます。2018年版教学部編観心本尊抄 186 頁には—「本門の本尊」は、釈尊・多宝という偉大な仏を脇士とする。これは「本門の本尊」である南無妙法蓮華經こそが、これらの仏を生み出した根源の仏種であることを端的に示すものである。このような本尊は正像には未だかつてなかったのである。ここで「寿量の仏」と言われているのは寿量下種の法、すなわち寿量品の文の底意として示された末法の人々に説き示して信受させるべき法を体現している仏という意味である—と。つまり、2018年版は極めてまっとうであり、明らかに**寿量の仏を大聖人**としています。しかしその5年後 2023 年に「**教学要綱**」が**寿量の仏＝釈尊**と記すと、その半年後 2024 年 5 月 3 日発刊の教学部編観心本尊抄の同じ 186 頁では、以下のように、「教学要綱」と同じなのです！

「日蓮がたましひ」の御本尊様の相貌について、教義変更をしているのです！私は、創価学会は、こんなデタラメでは宗教団体として自殺行為であると断じます！また、何と昨年末に実施された青年部 1 級試験は、「寿量の仏」＝釈尊とするこの教学部編観心本尊抄が教材だったのです！青年部を騙すな！です。



以上、1978年初頭の池田先生の観心本尊抄講義が、2024年発刊の教学部編観心本尊抄に至るまでに、「人法一箇」と「久遠元初の自受用身」、そして、日蓮仏法と釈迦仏法の勝劣、さらには池田先生の文学論にいたるまで、どれほど削除、改竄されてきたかを、後続の皆様のために記し置きました。そして、「教学要綱」の邪義も明白にしました。

本日、魂の独立記念日、今日も池田先生へ報恩感謝、追善回向を申し上げます。そして、日蓮仏法の真義と池田先生の正義を厳護すべく、池田門下生の使命感から、師敵対である「教学要綱」の邪義を糺し、即時の絶版を訴えました！

私は、学会教学の現状は、日顕が教義を自己解釈したよりも更に酷く、日蓮仏法の根本義を投げ捨て、まさに、魂の自己否定であると断じます。そして、「教学要綱」を絶版する時が本当の「魂の独立」となると確信しております。

この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を、kiiroibara.526@gmail.com にお願ひ申し上げます。

敬具 図斉修